

研究資料

アフリカにおける舞踊とツーリズム —タンザニアを事例に—

相原 進*

1. はじめに

タンザニアにおいて、観光は主要産業のひとつである。観光の中心となっているのはサファリやリゾートであるが、今日では、舞踊も観光資源として注目されつつある。本研究では、タンザニアにおける舞踊とツーリズムとの関係を明らかにするために、舞踊団、音楽学校や博物館、音楽祭での調査を行い、調査結果をもとにタンザニアのツーリズムについての考察を行う。

考察においては2つの点に着目する。1点目は「コーディネーターの役割」である。タンザニアにおける舞踊は、観光のコンテンツとしては発展途上の段階にある。そこで舞踊家など現地の人々と旅行者との関係を調整するために、コーディネーターが重要な役割を果たしていることを明らかにする。

2点目の着目点は「真正性」である。タンザニアの舞踊ツーリズムにおいては、舞踊の鑑賞や体験などが旅行者に提供される。これらについて、体験を提供する側である舞踊家などの人々と、体験者である旅行者の双方において真正性が重要な意味を持つ場合がある。本研究では、舞踊家たちがどのような言説を用いて自らの真正性を主張す

るのかということと、旅行者がどのように真正性を要求するかについて分析し、両者の間において真正性が構築されていく過程を明らかにする。

2. タンザニアの概要と観光・舞踊

タンザニア連合共和国は中央アフリカ東部に位置しており、1961年にイギリスの植民地から独立した。1964年にはアフリカ大陸側のタンガニーカと島嶼部のザンジバルとが連合してタンザニア連合共和国が成立し、1985年には2代目大統領アリ・ハッサン・ムウィニのもとで自由経済となり今日に至っている。タンザニアにおいて、観光は主要産業のひとつである。とくに島嶼部のザンジバルは、リゾート地として1970年代から欧米企業の投資対象となってきたおり、ザンジバルのストーンタウンは2000年に世界遺産として登録されている。2001年以降、GDPに占める観光産業の割合は12%前後で推移しており、2015年時点では11.8%となっている(WORLD TRAVEL & TOURISM COUNCIL 2016)。このような中で、舞踊も観光資源として注目されつつある。

タンザニアにおいて、舞踊はスワヒリ語で「ンゴマ ngoma」と呼ばれ¹⁾、子供の誕生祝い、求婚、結婚式など、生活の中のさまざまな場面で演じら

* 立命館大学産業社会学部，四天王寺大学人文社会学部非常勤講師

れる²⁾。タンザニアの独立以後、舞踊は政治とも密接に関わってきた³⁾。初代大統領のジュリウス・ニエレレは、国民のアイデンティティを確立する手段の1つとして伝統音楽や舞踊を支援した。そしてニエレレの支援政策のもと、タンザニアを代表する音楽家としてフクウェ・ウビ・ザウオセ Hukwe Ubi Zawose が世界的に活躍した。しかし1990年代以降、文化支援政策は、ティンガティンガ派などに代表されるアフリカンポップアートを対象としたものが中心となり、舞踊や音楽への支援政策は実質的に行われなくなった。政府の支援が断たれた音楽家や舞踊家は、自らの手で生き残る方法を模索することになった。そのような状況のもとで、舞踊家たちは、プロとして、地域社会の要請に応じて結婚式などで舞踊を行う以外に、観光客を相手に舞踊を披露したり、タンザニア国外での公演を通じて外貨を獲得したりするようになっていった。今日のタンザニアでは、コミュニティにおける生活と関わる舞踊が衰退する一方、ガイドブックやインターネットなどを通じて、観光コンテンツの1つとして舞踊が取り上げられるようになってきている。本研究で調査対象とした舞踊団や各種文化施設も、このような流れの中にある。

3. 事例調査

筆者は2014年2月、筆者はタンザニアにて伝統的な舞踊に関する調査を実施している。その中から舞踊とツーリズムに関わる調査の概要について、時系列に沿って述べる。2月8日から2月11日まで、地方都市バガモヨを拠点とする「チビテ Chibite 舞踊団」と共同生活を送り、舞踊団の活動について参与観察および聞き取り調査を実施した。2月11日、ダルエスサラーム郊外のビレッジ・ミュージアムにて主任学芸員のフローラ・ビンセント⁴⁾に対し、博物館における舞踊の上演につ

いての聞き取り調査を実施し、その上で、同博物館にて舞踊を実演している「クシニ・ウモジャ・グループ Kusini Umoja Group」での参与観察と聞き取り調査を実施した。

また、2月13日から2月16日まで、ザンジバルにて、音楽祭「サウチ・ザ・ブサラ Sauti za Busara」、音楽学校「ダウ・カントリーズ・ミュージック・アカデミー Dhow Countries Music Academy (DCMA)」にて参与観察および関係者への聞き取り調査を行った。

3-1 ビレッジ・ミュージアム

ビレッジ・ミュージアムは、タンザニア最大の都市であるダルエスサラームの郊外に位置する博物館である。この博物館は1992年に設立され、「タンザニア国立博物館」のコンソーシアムに組み込まれている施設の1つとして運営されている。この博物館は、おもにタンザニアの住環境を扱っており、タンザニア各地・各時代における住居の実物展示が行われている。博物館の中心の広場では、毎日、伝統的な舞踊を鑑賞できる。2014年時点では、開館時間は午前9時から午後6時までで、休館日は決められていない。入場料は約1ドルで、写真やビデオ撮影には別料金が必要となる。

2014年2月11日、博物館内の主任学芸員室にて、この博物館での舞踊の展示について主任学芸員のフローラ・ビンセントに対する聞き取り調査を実施した。聞き取り調査においては、①博物館にて舞踊を演じている舞踊団の概要、②博物館と各舞踊団との関係、③舞踊を行う際の方針について質問した。

1点目の博物館にて舞踊を演じている舞踊団について、博物館では「ハヤ・ナヤ・グループ Haya Naya Group」「ンチャブエデ・グループ Nchabwede Group」「クシニ・ウモジャ・グループ」の3つの舞踊団と提携しており、3つのグループは決められた曜日に博物館で上演を行うことにな

っているという。上演時間や上演回数については、実質的に各舞踊団の判断に委ねられている。

2 点目の博物館と各舞踊団との関係について、博物館と舞踊団との間に契約関係はあるが、金銭の授受は行われていないとのことであり、この背景には博物館の経営事情があるという。タンザニアでは博物館の経営に対する政府の援助が乏しく、少ない予算の中で展示を充実させていくしかない。そのため、博物館は舞踊団に対し金銭を支払わない代わりに、上演のための場所を提供するとともに、博物館の宣伝の中で舞踊団も積極的に紹介する。そして舞踊団は、来場者の投げ銭（撮影料を含む）により収益を得ている。このような仕組みのため、舞踊団は決められた時間・回数のみ舞踊を演じるのではなく、来場者の流れが多い際には即座に舞踊の上演を開始しているという実態がある。

3 点目の舞踊を行う際の方針について、主任学芸員のビンセントは、舞踊団の選定のためにダルエスサラームのプロの舞踊団を見て回ったという。そしてもっとも技量に優れた舞踊団を3つ選び、各舞踊団に対し先述した条件を提示して契約した。また、各舞踊団に対して、この博物館の主たる目的は「教育と保存」であるため、舞踊団が独自にアレンジした音楽や舞踊の上演を認めないという方針を厳守するように伝えている。



写真1 レッジミュージアムでの舞踊実演

調査日の2月11日に上演を行っていたのは「クシニ・ウモジャ・グループ」であった。同グループの団員であるチチ・ニェニューアに対し聞き取り調査を行い、アレンジの禁止に関する運営方針が現場においても徹底されていることを確認した。この日の上演内容は、リンゴンド Lingondo を中心として、リンゴンジウム Lingonjum, サンバルコ Sambaluko, クク・アテメベ・キドド Kuku Ateembe Kidodo の計4演目の舞踊を演じているとのことであった⁵⁾。

3-2 サウチ・ザ・ブサラ

「サウチ・ザ・ブサラ」⁶⁾ は、島嶼部のザンジバルで開催される東アフリカ最大の音楽祭である。この音楽祭は2003年より毎年2月に開催されており、調査を行った2014年は第11回目にあたる。運営母体はNGO団体のブサラ・プロモーションズであり、この団体は非営利で運営されている。また、音楽祭のスポンサーとしてザンジバルのホテルや土産物店が協力している他、プロモーターやオフィシャルパートナーの形でノルウェー大使館、スイス大使館、ドイツ大使館なども協力している⁷⁾。

音楽祭の中心となるのは、沿岸部にあるオールド・フォートという17世紀に築かれた砦で開催されるコンサートである。コンサートは夕方から



写真2 DCMAでの舞踊体験プログラム

深夜にかけて開催され、アフリカ各地から招聘されたグループが順番に演奏を行う。音楽のジャンルは多岐に渡り、ポップスや、アフリカ各国の伝統的な音楽や舞踊などが演じられる。入場料はチケット購入者の出身国によって異なる。2014年の音楽祭では、アフリカ以外の外国人向けチケットが125ドル、外国人プレミアチケットが200ドル、タンザニア以外のアフリカ出身者の場合はこれらの価格の50%となり、タンザニア人では10%となる。

音楽祭の期間中、ザンジバルの音楽学校である「ダウ・カントリーズ・ミュージック・アカデミー (DCMA)」⁸⁾ が、音楽と舞踊のワークショップを実施している。時間は午前10時から午後1時までとなっており、前半の1時間半が太鼓、後半の1時間半が舞踊で、それぞれの料金は15ドルである。このワークショップでは同校の音楽講師ケリー・モド・コンボの指導のもと、ザンジバルの伝統的な舞踊と音楽を体験することができる。タンザニアにおいて、舞踊は観光コンテンツとして成長途上にある。そのような中で、観光客が体験することを前提とした舞踊のプログラムが提供されていることは、タンザニアにおける舞踊と観光との関係における可能性を示唆していると言える。

3-3 チビテ舞踊団

「チビテ舞踊団」は、ダルエスサラームから北へ約70キロに位置する地方都市バガモヨを拠点に活動している。この舞踊団は1994年に音楽家のフクウェ・ウビ・ザウォセによって結成され、2014年時点で約40名の団員が所属している。フクウェの死後も彼の子孫たちが中心となって活動を続けており、日本やアメリカでの公演を成功させている。彼らの演目の特徴として、伝統的な舞踊そのものを演じるのではなく、いくつかの伝統的な舞踊をミックス、アレンジして上演している

ことが挙げられる。

チビテ舞踊団では、観光も重要な収入源とされている。舞踊団と旅行会社とが提携し、舞踊団と生活をともにするエコ・ツーリズムや、音楽・舞踊のレッスンなどの体験型ツアーを提供している。この例として、日本人の根本利通が代表となっている「JATA ツアーズ」と提携しているツアーを挙げる⁹⁾。JATA ツアーズはダルエスサラームに本社を置いており、チビテ舞踊団との提携のもとで「タンザニアの伝統音楽を学ぶ『CHIBITE ツアー』」を主催している。このツアーではチビテ舞踊団の団員たちの家にホームステイしながら、1日2時間の舞踊と音楽のレッスンを受けられる。レッスン以外の時間は、舞踊団員との交流やバガモヨの名所を見学するなど、参加者は自由に過ごすことができる。レッスン、宿泊費、食事代はツアー代金に含まれているが、舞踊団員にガイド、取材、研究協力などを依頼する場合、参加者が独自に団員と交渉することになる。ツアー日程は計9日となっているが、移動やオリエンテーションなども含むため、ツアー参加者が舞踊団と共同生活を送るのは実質5日間となっている。

このツアーは募集時点で「オルタナティブツアー」を掲げており、舞踊や農村生活を体験することを目的として催行されている。また、参加者の目的が、舞踊や農村生活の体験にとどまらない場



写真3 「CHIBITE ツアー」での共同生活体験

合もある。ツアーを企画した JATA ツアーズが人類学の研究者などとの交流が深いこともあって、筆者のような調査者が、このツアーのパッケージを利用してバガモコでの農村調査を行うケースもある。それ以外にも、日本などでプロの音楽家や舞踊家として活動する者が、ツアーのパッケージを1カ月以上の長期滞在型にアレンジした上で、舞踊団にて太鼓や舞踊のトレーニングを受けるケースもある。

チビテ舞踊団のツアーにおいては、ツアーのパッケージの大枠を決めた上で、これを柔軟に運用して旅行者のニーズに対応していることが特徴であるとと言える。

4. 事例についての考察

これまで挙げてきた事例について、観光に関わる旅行者と現地住民との関係や、橋本(2016)によるツーリズムにおける体験や真正性に関する論考を踏まえた上での考察を行う。

4-1 コーディネーターの役割

人類学や社会学において観光を扱う場合や観光学においては、観光客をゲスト、観光客を迎える現地の人々をホストとするような、役割論の観点から分析を行うことが多いように思われる¹⁰⁾。そのような役割論の観点に立った場合、タンザニアにおいては、旅行者や現地住民などの調整役としての「コーディネーター」が重要な役割を果たすと考えられる¹¹⁾。

コーディネーターの例として、先述した JATA ツアーズの「チビテツアー」を挙げる。ツアーにおける体験の内容や、それにかかる費用については、事前に JATA ツアーズのスタッフがすべてチビテ舞踊団側との交渉を終えている。先述したサウチ・ザ・ブサラのチケット料金のように、タンザニアでは、タンザニア人、タンザニア以外の

アフリカ人、アフリカ人以外で大きく異なる料金が設定されていることは珍しくないため、国外からの旅行者は思わぬ負担を強いられる可能性がある。たとえばチビテツアーの場合、JATA ツアーズが想定していないオプションについては、旅行者自らが舞踊団員と交渉する必要がある。この交渉は、場合によっては数分程度で終わり、支払われる額も低額に収まることもあるが、舞踊団員との交渉が数日に渡る上、提示された値段から根気よく値下げ交渉を行わなければならない場合もある。このような交渉における旅行者の負担を避けるため、ツアーの内容に含まれるものに関しては、ツアー開始前に値段交渉を終えた状態になるように JATA ツアーズのスタッフがコーディネートしているのである¹²⁾。

次に、旅行者、地域住民、主催者など調整するコーディネーターの事例として、サウチ・ザ・ブサラでの例を挙げる。音楽祭の期間中にはコンサート以外にもさまざまなプログラムが提供されるが、その中にはシンポジウム形式のものもある。2014年の場合、2月15日に「外国とのパートナーシップの進展の意義」が開催されており、ここではアフリカ各国の音楽祭のプロデューサーなどが集まって情報交換することが目的となっていた。シンポジウムには誰でも参加できるが、約



写真4 シンポジウム「外国とのパートナーシップの進展の意義」の様子

50人の参加者のほとんどがアフリカ各地で開催される音楽・舞踊のイベント関係者であり、開始前、参加者に対し記帳と身分の照会が求められ、シンポジウムの冒頭には、参加者全員に対し出身国と職業などについての自己紹介を求められる。その後、イベントの運営をテーマとして3名の代表者がスピーチを行った後、運営側のファシリテーターの指示に従い、出席者は10人程度のグループに分けられ、ブレインストーミング形式での議論と情報交換が行われる。議論の内容は「イベント運営に関わる情報の共有」「地域社会との連携」についてである¹³⁾。また、ファシリテーターは直接提示しないが、スポンサーの獲得に関する情報交換や人脈作りも参加者の目的となっている。

このような場が設けられる理由として、第1に、アフリカ各国におけるや音楽・舞踊イベントやツーリズムに関する知識・情報の蓄積が乏しいこと、第2に、タンザニア政府に限らず、音楽・舞踊イベントに対するアフリカ各国の政府からの支援が乏しいことが挙げられる。そこでこのような場を利用して、関係者間で音楽・舞踊イベントに関する情報の共有、地域社会との連携、スポンサーの獲得などについての議論が行われている。サウチ・ザ・ブサラを運営する「ブサラ・プロモーションズ」は、非営利のもとで情報交換の場を提供するとともに、地域社会の人々との調整を行うという形でコーディネーターの役割を果たしているのである。

4-2 舞踊ツーリズムにおける真正性

ツーリズムにおける真正性について、橋本(2016)は「クール(客観的)な真正性」と「ホット(主観的・実存的)な真正性」についての議論をもとに、スポーツ観光者を「パフォーマー・観光者」として捉えた上で、「ホットな真正性における『真正化のプロセス』」に注目して論

考を進めている。論考で取り上げられた事例では、自転車競技の有名な大会と同じコースを走るという、客観的事実をもとにした「クールな真正性」に基づく体験を通じて、スポーツ観光者が主観的な「ホットな真正性」を獲得していくという「真正化のプロセス」についての事例分析が行われている。また、同論考では「スポーツ」と「観光」とを別々の領域に指定し、それらの交わる地点で「スポーツ観光」が成立すると述べられている。その上で「余暇にスポーツマンが本格的に取り組む『シリアス・スポーツ』を『シリアス・レジャー』の領域に設定」し、その対極に「『楽しみのために、ほんの少し垣間見る』だけの典型的な大衆観光(カジュアル・スポーツ, カジュアル・レジャー)を指定している。そして「スポーツ観光」が、「スポーツ的聖性の度合」と「観光的楽しみの度合」にもとづいて、「シリアス・レジャー」「カジュアル・レジャー」の双方に渡るものとなりうることを示している。

橋本の論考は、タンザニアの舞踊ツーリズムと真正性について考察する上での重要な指針となりうる。真正性の問題について、今日のタンザニアにおける舞踊研究や舞踊教育は黎明期にあり、スタンダードな舞踊教育プログラムや舞踊教材が存在しないため、舞踊ツーリズムにおける「クールな真正性」となりうる基準が存在しないのが現状である¹⁴⁾。一方、タンザニアの舞踊ツーリズムにおける「ホットな真正性」については、2つの点に着目して考察できると考えられる。1点目は、舞踊家などが、真正性についてどのような言説を用いて主張しているのかについてである。そして2点目は、旅行者において、舞踊体験や舞踊家たちの言説を通じて、どのような「真正化のプロセス」を経て「ホットな真正性」が構築されていくのかという点についてである¹⁵⁾。

舞踊家などによる真正性の主張について、調査では「正統性」「実績」「不変性」「技術」の4つ

を見出すことができた。チビテ舞踊団の場合、団員たちが主張するのは「正統性」と「実績」である。舞踊団リーダーのタブ・フクウェ・ザウォセに対する聞き取り調査において、タブは、自分たちが偉大な音楽家の後継者であるという「正統性」を主張した。タンザニア国外での公演では、舞踊団員がフクウェ・ウビ・ザウォセの子孫であるという「正統性」が彼らのブランド力を高めているという側面がある。そのような事情を踏まえ、タブは、自分たちをフクウェ・ウビ・ザウォセの偉業を受け継ぐ者とした上で、その音楽や舞踊を「Culture of Tanzania」としてアピールしようと考えている。この主張に加え、タブは、これまでも日本やアメリカでの公演を成功させているという「実績」を主張している。チビテ舞踊団による真正性に関する言説の特色は、偉大な音楽家の子孫であることを背景とした「正統性」と、国外での公演などの「実績」に重点を置いていることであり、これら2つは相互補完的な関係にあると考えられる。

ビレッジ・ミュージアムの場合、この博物館における真正性の主張は、上演される舞踊がアレンジされていないという「不変性」と、主任学芸員がダルエスサラームにおいてもっとも高い技術を持つ舞踊団を選んだことを理由とする「技術」の2つによって行われている。ただし「不変性」については、先に述べたようにタンザニアにおける舞踊研究が未成熟なため、不変であることの根拠が曖昧であるという欠点がある。また、チビテ舞踊団の場合、伝統的な舞踊をアレンジ、ミックスしたものを演じているため、ビレッジ・ミュージアムとは正反対の戦略を採っていると言える。

次に、旅行者における「真正化のプロセス」と「ホットな真正性」の構築について考察する。「ホットな真正性」の構築については、旅行者が、舞踊というスポーツ観光において「シリアス・スポーツ」「カジュアル・スポーツ」のいずれを求め

るかによって、真正性の重要性、すなわち「スポーツ的聖性の度合」が異なると考えられる。

たとえばチビテツアーの場合、「カジュアル・スポーツ」を求める旅行者にとっては、舞踊と音楽の体験における「ホットな真正性」は厳密に考慮されるものではない。しかし、日本などでプロとしてアフリカの音楽や舞踊を演じる活動をしている者にとって、チビテツアーは「シリアス・スポーツ」となる。チビテ舞踊団で修行したことが日本において大きな実績やアピールポイントとなるため、「チビテツアー」における「真正性」は、彼らにとって重要な意味を持つ。さらに彼らは、ツアーを通じて構築された「ホットな真正性」を、音楽家や舞踊家としての活動を通じて自らが主張することになる。

先述した橋本（2016）の図式は、本研究で例に挙げた「チビテツアー」という「スポーツ観光」が、「シリアス・スポーツ」にも「カジュアル・スポーツ」にもなりうるという事例の分析に成功していると考えられる。

5. おわりに

タンザニアのみに限らず、アフリカでは、舞踊が生活と密接に関わっている。舞踊ツーリズムは、観光を通じてアフリカの文化を知ることができるという点において、大きな可能性を有していると思われる。しかしタンザニアにおいて、舞踊ツーリズムは発展途上の段階にある。そのような段階であるがゆえに、ホスト側におけるツーリズムに関する知識や経験の不足を補い、ホストとゲストを繋ぐ役割などを果たすコーディネーターが重要となっているという実態がある。そこで本研究では、調査をもとにコーディネーターの役割を明らかにするという方針を採った。

また、舞踊ツーリズムは「見る観光」だけでなく、旅行者が体験できる「する観光」にもなり

うるという点に特色がある。そのため、タンザニアにおける舞踊ツーリズムは発展途上の段階にあるとはいえ、スポーツ・ツーリズムの可能性を広げるものとなりうると思われる。そこで本研究では、旅行者が舞踊ツーリズムを体験する場における「ホットな真正性」に着目し、旅行者と現地舞踊家との間で「ホットな真正性」が構築される過程を明らかにすることにした。

タンザニアにおける舞踊ツーリズムは発展途上にある。また、舞踊教育や舞踊家に対する政府からの支援が乏しい中で、舞踊家たちは生存戦略の一環として舞踊ツーリズムに関わっているという側面もある。本研究では、調査をもとに舞踊ツーリズムにおけるコーディネーターの役割と真正性についての考察を行ったが、これらを通じて、今日のタンザニアにおける舞踊とツーリズムとの関係の一端を明らかにできたと考えている。

本研究における考察を踏まえた上で、今後の課題や展開について述べたい。1つ目は、今後の課題として、タンザニアの舞踊についての基礎調査と研究をさらに進めることが挙げられる。タンザニアにおける舞踊について、本研究では、真正性における「ホットな真正性」の比重が大きいかを明らかにした。今後、舞踊と歴史・社会との関係、地域間の比較、舞踊動作の特色の検証、舞踊の記録などの「クールな真正性」に関わる研究を進めることで、タンザニアの舞踊や観光に資することができると思われる。

2つ目は、本研究などを通じて、アマチュア・スポーツやスポーツ観光への見解を深めることである。スポーツに関わるすべての人々がプロを目指すわけではないのは自明である。スポーツ観光における「シリアス・スポーツ」「カジュアル・スポーツ」のような観点は、今後、アマチュア・スポーツの可能性を示すことに貢献できると考えられる。また、旅行が「シリアス」にも「カジュアル」にもなりうることを踏まえれば、スポーツ

観光は、競技に対する態度を基準とした「シリアス」「カジュアル」のみにとどまらず、異文化理解や国際的な課題発見といった方向にも開かれていると考えることができる。

スポーツや旅行への関わり方は多岐に渡る。スポーツ人類学の立場から、スポーツとツーリズムについてのさまざまな可能性を示すことは、今後のスポーツ文化において重要な意味を持つことになるであろう。

【注】

- 1) Otiso (2013) によると、スワヒリ語の「ンゴマ」は「太鼓」と「舞踊」の双方を指す語であり、太鼓の演奏は「ピガ・ンゴマ piga ngoma」、舞踊によるパフォーマンスは「チェザ・ンゴマ cheza ngoma」というように用いられ、演劇や呪術を指し示す際にも「ンゴマ」を用いる場合があることを紹介している。
- 2) タンザニアおよびアフリカにおける舞踊の詳細や、舞踊と生活との関りについては、遠藤・相原・高橋(2014)、相原・遠藤(2014)、遠藤(2014)などを参照。
- 3) タンザニアにおける文化政策については、Askew(2002)やEdmondson(2007)が詳しい。タンザニアにおいて舞踊や音楽に対する支援が少ないことについては「チビテ舞踊団」団員への聞き取り調査の中でも同様の証言が得られている。また、「サウチ・ザ・ブサラ」を主催する「ブサラ・プロモーションズ」は、音楽祭が始まって以来、タンザニア政府からの支援を一切受けていないことをホームページ上でアナウンスしており、政府以外に支援してくれる人々が多くいることのアピールと、支援への感謝を表明している。
- 4) 調査対象者のフローラ・ビンセントは、2010年に博物館に赴任している。
- 5) タンザニアの舞踊の概要や動作特性については、相原・遠藤(2014)を参照。
- 6) 音楽祭の名称は、スワヒリ語で「知恵の声」という意味である。
- 7) 「サウチ・ザ・ブサラ」ホームページ (<http://www.busaramusic.org/>) 参照。
- 8) ダウ・カントリーズ・ミュージック・アカデミー (DCMA) は、2002年にザンジバルに設立された。運営方針、在籍する教員、教育プログラムについては、DCMAの

オフィシャルホームページ (<http://www.zanzibarmusic.org/>) に掲載されている。

- 9) 筆者の場合、2008年にチビテ舞踊団を日本へ招聘して実施した研究の継続調査を行うためにチビテ舞踊団での調査を実施した。そのための費用を勘案した結果、JATA ツアーズのパッケージを利用することになり、ツアー内で設定された舞踊と音楽のプログラムを体験しつつ、それ以外の時間は筆者が予定していた調査を実施している。
- 10) ホストとゲストという枠組みでの分析はスミスに始まる (Smith 1977)。以後、ゴフマンの社会学を応用したアーリとラスンの研究などへと展開していく (Urry & Larsen 1990)。これらでは分析しきれないような旅行者の体験について、橋本 (2016) は「パフォーマー・観光者」という視点を提示している。
- 11) 須藤・遠藤 (2005) においては、観光社会学の枠組みとして「社会的・文化的背景」のもとでの「ツーリスト (観光を消費する者)」「地域住民」「プロデューサー (観光を制作するもの)」の関係性を提示している。本稿の研究における「コーディネーター」について「プロデューサー」と異なる点として、ホストとゲストとの調停を行う行為者として「コーディネーター」を想定していることと、サウチ・ザ・ブサラの事例のように「コーディネーター」が利益を目的としない場合もあることが挙げられる。
- 12) 本文中で挙げた事例は、タンザニアの商習慣を背景として、互いの交渉のみで解決する問題である。しかし交渉から暴力などの問題に発展するケースもあり、アフリカ旅行についての日本人向けのガイドブックでは、このようなトラブルの事例についての情報が提供されている。この問題の根本にかかわるものとして「文明化」や「感情労働」をめぐる多くの議論が交わされている。
- 13) 「地域社会との連携」では「雇用の創出」について議論が交わされ、ボランティアについては一切議論の俎上に載らないことが特徴的であると思われる。
- 14) 舞踊などの文化についての「クール (客観的) な真正性」の基準については、たとえば WORLD HERITAGE CENTRE による世界遺産における真正性に関する規定が参考になると考えられる (WORLD HERITAGE CENTRE 2013)。舞踊の教材や教育方法について、タンザニアでは、各種学校や、職業指導を行うコミュニティセンターなどが舞踊教育を独自に行っており、相互の情報交換や知識の共有が行われていないのが現状

である。舞踊研究や舞踊教育の蓄積についてガーナの事例を挙げると、Younge (1992) は1960年代から1990年代のガーナにおける舞踊の教材について概観し、小学校から大学までの各段階における音楽・舞踊の基本的教育のための教材が必要に応じて作られてきたと指摘している。ガーナ大学ではガーナ独立以降、ガーナ各地にて舞踊の映像を収録しており、それらの記録はすべて J.H.K. シンケティア・アーカイブズ J.H.K. Nketia Archives に保存されている。このような事例と比較すると、タンザニアにおける舞踊の教材や記録などの不足が、よりいっそう明らかとなる。

- 15) 本研究では、橋本 (2016) の論考に加え、構築主義におけるオントロジカル・ゲリマンダリング批判以降の方法論に関する議論 (平・中河 2000) も踏まえた上で、「真正化のプロセス」に焦点を当てるという方針を採っている。

【引用・参考文献】

- Askew K. M. (2002) *Performing the Nation - Swahili Music and Cultural Politics in Tanzania*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Cohen, E. & Cohen, S. (2012) Authentication: Hot and Cool, *Annals of Tourism Research*, 39(3): 1295-1314, Amsterdam.
- Edmondson L. (2007) *Performance and Politics in Tanzania - The Nation on Stage*, INDIANA University Press, Bloomington.
- Otiso K. M. (2013) *Culture and Customs of Tanzania*, GREENWOOD, Santa Barbara.
- Urry, J. & Larsen J. (2011) *THE TOURIST GAZE 3.0*, Sage Publications, London. [加田宏邦訳 (2014) 『観光のまなざし (増補改訂版)』法政大学出版局, 東京]
- Younge P.Y. (1992) *Musical Traditions of GHANA volume one - A HANDBOOK For Music Teachers and Instructors of West African Drumming*, APE.
- 相原進・遠藤保子 (2014) 「坦桑ニア舞踊和舞踊の數位記録, 解析 The Digital Recording and Analysis of Tanzanian Dance」台湾身体文化学会 『身體文化學報』19, pp.27-47, 台北。
- 遠藤保子・相原進・高橋京子編著 (2014) 『無形文化財の伝承・記録・教育 アフリカの舞踊を事例として』文理閣, 京都。
- 遠藤保子 (2014) 「舞踊」日本アフリカ学会編 『アフリカ学事典』58-59 頁, 昭和堂, 京都。
- 栗田和明・根本利通編著 (2015) 『タンザニアを知るため

- の60章(第2版)』明石書店, 東京。
- 平英美・中河伸俊編(2000)『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社, 京都。
- 根本利通(2011)『タンザニアに生きる 内側から照らす 国家と民衆の記録』昭和堂, 京都。
- 橋本和也(1999)『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方—世界思想社, 京都。
- 橋本和也(2011)『観光経験の人類学—やげものとガイドの「ものがたり」をめぐって—』世界思想社, 京都。
- 橋本和也(2016)「スポーツ観光研究の理論的展望—『パフォーマー・観光者』への視点」観光学術学会『観光学評論』Vol.4-1, pp.3-18, 大阪。
- Dhow Countries Music Academy (<http://www.zanzibarmusic.org/>) 最終閲覧日2016年12月14日。
- WORLD HERITAGE CENTRE (2013) Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention (<http://whc.unesco.org/archive/opguide13-en.pdf>) 最終閲覧日2016年12月14日。
- Sauti za Busara (<http://www.busaramusic.org/>) 最終閲覧日2016年12月14日。
- WORLD TRAVEL & TOURISM COUNCIL (2016) Travel & Tourism - ECONOMIC IMPACT 2016 TANZANIA (<http://www.wttc.org/>) 最終閲覧日2016年12月14日。